

被爆 77 年。過去を見つめ、未来を考える

— 広島 YWCA のいま

中澤晶子 (広島 YWCA 会員、子どもの本作家)

広島に夾竹桃の季節がやってきた。「あの赤い花で当時を思い出す」と修学旅行生に語った被爆者も、その多くが冥界に旅立ち、被爆者の平均年齢は、84 歳を超えた。

歴史は繰り返す。突如、燃えあがった戦火は、今もなお、ひとを、くらしを、大地を焼き、敵味方を問わず若者が未来を絶たれ、家族の涙は枯れることがない。

今年に入って、3 冊の本を再読した。『戦争は女の顔をしていない』『ボタン穴から見た戦争』『アフガン帰還兵の証言』。いずれも、ベラルーシとウクライナにルーツを持つ、スヴェトラナ・アレクシエーヴィチの著作である。女性、子ども、若者。収められた人々の声は、当時と今の間に横たわる時間を、一気に縮める。

このたび戦争を仕掛けた為政者は、こともあろうに核兵器による攻撃をほのめかした。これに対して、即座に抗議の声を上げたのが被爆者だった。自分たちのような思いは、二度とだれにもしてほしくない。その熱く、深い祈りにも似た思いを抱いた人々は、為政者の暴言を看過できなかった。それは、わたしたち広島 YWCA とて同じ思いだった。

広島 YWCA の平和のための活動は、日本 YWCA に連なる「ひろしまを考える旅」をはじめ、夕張の子どもたちのための平和プログラム、慰霊碑巡りの学習会 (カンナの会)、フィールドワーク、「9」の日の平和公園サイレントアピールなど、広島ならではの軸に沿って行われている。すなわち、今は亡き関千枝子さんをはじめ、多くの被爆者から語ってもらった思い・記憶を、次世代に手渡していく。それがわたしたち広島 YWCA の使命と考えている。

1980 年代、広島 YWCA にひとつの転機が訪れる。当時、ホストファミリー運動が盛んになり、広島 YWCA もマレーシア、インドネシア、中国、韓国からの留学生と交流を持つようになった。そのなかで学んだことが、現在の広島 YWCA を支える、もうひとつの軸であり、それが「アジアから見た広島」である。マレーシアの歴史教科書に記述されていたことは、何だったのか。留学生が語る「日本人の知らない、知ろうとし

ない歴史」を目の当たりにした時、わたしたちの目は、ともすれば忘れがちだったアジア侵略の一大拠点としての「軍都広島」に向けられることとなった。これらの歴史を見つめ直さずして、被爆の広島のみを語ることは、明らかにおかしい、と学んだのだった。在日韓国人被爆者の渡日治療・被爆者健康手帳取得の支援活動は、こうした学びの中から生まれた。このような観点から、広島 YWCA は、今日に至るまで、旧陸軍被服支廠、陸軍の検疫所があった似島などのフィールドワークなども積極的に行い、近隣の YWCA を巻き込んで、その回を重ねている。いずれも、アジア侵略の軍事拠点であり、かつ被爆の歴史を刻む数少ない「現場」である。東京 YWCA のみなさんも、広島にお越しの節は、ぜひこれらを見て、感じていただきたいと願っている（喜んでご案内します）。

ウクライナの戦火が、どのような形で収まっていくのか見通せない中で、広島・長崎は 77 年目の「あの日」を迎える。どうすれば、声は届くのか。「平和を実現する人々は幸いである」（マタイによる福音書 5 章 9 節）を胸に、わたしたちは広島の声を、世界へ、次の世代へ、確かなものとして手渡していきたいと願っている。